

中学生に対する集団社会的スキル訓練の効果

——罰への感受性による効果の差異の検討——

蓑 崎 浩 史*

(受付 2019年5月31日)

問 題

社会的スキルとは、対人場面において相手に適切かつ効果的に反応するために用いられる言語的・非言語的な対人行動のことである。このような社会的スキルに問題を抱える児童生徒は、仲間からの孤立（相川，1998），強いストレス反応（戸ヶ崎・岡安・坂野，1997），抑うつ増大（今津，2005）などを示しやすいことが多くの研究によって指摘されている。社会的スキル訓練（Social Skills Training：以下，SST）とは，そのような対人関係上の問題を，未学習あるいは誤学習による社会的スキルの欠如としてとらえ，不適切な行動を修正し，適切な社会的スキルを積極的に学習させながら，対人関係上の障害やつまずきを改善しようとする心理学的支援法のひとつである（Ladd, 1985；佐藤，1999）。

従来，児童生徒に対するSSTは，引込み思案や攻撃行動を強く示す児童生徒などを対象に個別形式や小集団形式で実施されてきたが，2000年頃から，学級などの集団を対象として実施されるようになってきている（後藤・佐藤・佐藤，2000；江村・岡安，2003など）。そのなかで，学級を対象とした集団形式でのSSTは，学校教育現場における心理教育的援助に関する段階の一次的援助サービスとして整理されたこともあり（たとえば，石隈・水野，2009），学校教育現場で広く展開されるようになり，その効果についても，不適切な行動の改善および適切な社会的スキルの増大に伴って，心理的ストレス反応や抑うつなどの心理的症状が軽減することが繰り返し実証されている（高橋・小関，2011）。また，近年では，集団SSTの効果の長期的維持に関する研究も行われ，効果を維持するための手続きなどが検証されている（荒木・石川・佐藤，2007；石川・岩永・山下・佐藤・佐藤，2010）。

ところで，集団SSTでは，学級成員すべてを対象にしているものの，すべての児童生徒に等しく効果が生じるわけではない。集団を対象にするがゆえに，必ず効果の発現には個人差が生じることは自明である。この課題に対して，これまでの集団SST研究では，児童生徒の

* 広島修道大学健康科学部

有するさまざまな個人差に対応するために、複数の社会的スキルを訓練の内容に組み込んできた（荒木他，2007；石川他，2010）。一方で、どのような個人差が集団 SST の効果に差異を生じさせるかについて検討している研究は少ない。森・蓑崎・森本・長瀬・嶋田（2012）は、生徒の事前の適応状態の差異によって効果の程度を検討し、適応状態が効果に差異を生じさせることを明らかにした。また、中西・石川・神尾（2016）は自閉症スペクトラム傾向によって、効果に差があることを示している。児童生徒への開発的意義を踏まえれば、前述したように、複数の社会的スキルを長期間にわたって獲得させていくことの意義は大きいと考えられるが、昨今の学校教育現場の現状を考慮すると、より効率的に効果的な実践の可能性を検討することも一方で重要な視点であると考えられる。

社会的スキルとは、他者との相互作用の中で生起する一連の行動であるため、他者から得られる強化に関する個人内の感受性が、社会的スキルの獲得や生起に影響を及ぼす可能性がある。このような環境刺激に対する個人内の感受性について、Gray（1982）は、強化感受性理論（Reinforcement Sensitivity Theory: RST）を提唱している。RSTによると、人間の行動は Behavioral Inhibition System（行動抑制系；以下 BIS）と Behavioral Activation System（行動賦活系；以下 BAS）という大きなふたつの動機づけシステムの競合によって制御されていると考えられている。BIS は、罰の信号や欲求不満を引き起こすような信号、新奇性の条件刺激を受けて活性化される動機づけシステムで、潜在的な脅威刺激やその予期に際して注意を喚起し、自らの行動を抑制するように作用し、BAS は、罰の不在や報酬を知らせる条件刺激を受けて活性化される動機づけシステムで、目標の達成に向けて、行動を解発する機能を担うとされる（高橋・山形・木島・繁樹・大野・安藤，2007）。このことを踏まえると、児童生徒の社会的スキルの欠如においては、罰への感受性である BIS が影響を及ぼしている可能性があるのではないかと考えられる。小関・小関・中村・大谷・国里（2018）は、子どもの BIS および BAS を測定する尺度（Muris, Meesters, Kanter, & Timmerman, 2005）の日本語翻訳版を作成し、BIS あるいは BAS が、攻撃行動や抑うつ、外向性、情緒安定性といった変数と相関することを示している。特に罰への感受性である BIS は、抑うつと正の相関を示し、外向性と負の相関を示しており、行動を抑制する方向に影響することが明らかにされている。

以上のことを踏まえ、本研究では、罰への感受性を個人差変数として、集団 SST の効果にどのような差異を及ぼすかを検討することを目的とした。

方 法

対象者

公立中学校に在籍する中学1年生の男子生徒31名および女子生徒31名の計62名が本研究に

参加した。

測度

罰への感受性 中学生が有する罰への感受性の程度を測定するために、日本語版児童用 Behavioral Inhibition System and Behavioral Activation System Scale (小関, 2012; 小関他, 2018) を使用した。本尺度は、「BIS」「BAS-報酬性反応」「BAS-駆動」「BAS-刺激追求」の4因子20項目から構成される自己評定式の尺度であり、一定の信頼性と妥当性を有することが確認されている。また、「BAS-報酬性反応」「BAS-駆動」「BAS-刺激追求」の高次因子として「BAS」が構成され、「BIS」「BAS」の2因子として使用することが可能とされている(小関他, 2018)。したがって、本研究では、「BIS」「BAS」の2因子構造として使用した。「BIS」の得点が高いほど罰への感受性が高いことを示し、「BAS」の得点が高いほど報酬への感受性が高いことを示す。評定については原尺度と同様に「全然当てはまらない：0，あまり当てはまらない：1，少し当てはまる：2，よく当てはまる：3」の4件法での回答を求めた。なお、分析時に BIS の得点に基づいて、群分けを行った。

社会的スキル 中学生が有する社会的スキルの程度を測定するために、中学生用社会的スキル尺度(嶋田, 1998)を使用した。本尺度は「向社会的スキル」「引っ込み思案行動」「攻撃行動」の3下位尺度25項目から構成される自己評定式の尺度であり、一定の信頼性と妥当性を有することが確認されている。「向社会的スキル」の得点が高いほど適応的なスキルが高いことを示し、「引っ込み思案行動」および「攻撃行動」の得点が高いほど不適応的なスキルが高いことを示す。本研究においては、各因子4項目ずつ計12項目を使用した。また、評定については原尺度と同様に「全然当てはまらない：1，あまり当てはまらない：2，少し当てはまる：3，よく当てはまる：4」の4件法での回答を求めた。

心理的ストレス反応 中学生が示す心理的ストレス反応の程度を測定するために、中学生用ストレス反応尺度(嶋田, 1998)を使用した。本尺度は「身体的反応」「無気力」「抑うつ・不安感情」「不機嫌・怒り感情」の4下位尺度24項目から構成される自己評定式の尺度であり、一定の信頼性と妥当性を有することが確認されている。いずれの因子においても得点が高いほど、心理的なストレス反応が高いことを示す。本研究においては、各因子4項目ずつ計16項目を使用した。また、評定については原尺度と同様に「全然当てはまらない：1，あまり当てはまらない：2，少し当てはまる：3，よく当てはまる：4」の4件法での回答を求めた。

集団 SST の概要

集団 SST は、「あたたかい言葉かけ」を標的スキルとして行われた。SST の流れは、金山

(2006)に基づき、以下の内容で実施した。① SSTの授業におけるルールの提示、② SSTにおいて扱われる標的スキルについて、「つめたい言葉」と「あたたかい言葉」にはどのようなものがあるかを考えて発表させる、③「つめたい言葉」と「あたたかい言葉」を使用した場面のロールプレイを見せ、それに対する生徒自身の考えやこのクラスで受け入れられるスキルのポイントをワークシートに記入させる、④不適切なスキルを実行したモデルの改善点をワークシートに記入させる、⑤適切に標的スキルを実行するためのポイントを提示しモデリングさせる、⑥生徒同士で行動リハーサルを行わせ、授業者からのフィードバックを行う、⑦日常場面で標的スキルを使用することを奨励する、といった要素から構成し、実施した。また、集団 SST 終了時に、内容に関する理解度を問う質問項目への回答を求めた。

手続き

質問紙尺度への回答は、集団 SST 実施の2週間前と SST 実施3週間後に、在籍するクラスにて一斉に実施された。また、集団 SST は、生徒が在籍する教室にて、総合の時間をういて50分で実施された。

倫理的配慮

本研究を実施するにあたって、学校長、教頭、学年主任、学級担任らに対して、研究の目的、内容、期待される効果について説明を行い、データの匿名化を行うことを条件に、授業の一環として SST を実施することや、研究成果を公表することの同意を得た。さらに、質問紙の実施の際には、生徒に対し、質問紙への回答は任意であり、答えたくない項目には答えなくてもいいこと、成績等には関係ないこと、回答を先生や家族が見ることはないことを研究実施者または学級担任を通じて説明を行った。保護者に対しては、説明文書と研究目的でのデータの使用不可表明書を配布した。

結 果

分析対象

質問紙への回答の不備や欠席等で SST へ参加しなかった生徒(2名)、操作チェックとして集団 SST 直後に実施した理解度アンケートにおいて「内容を理解できなかった」と回答した生徒(1名)を除外し、男子生徒30名および女子生徒29名の計59名を分析対象とした。

因子構造の確認

本研究では、社会的スキル尺度および心理的ストレス反応尺度の項目を各因子4項目に減

らして使用したため、確認的因子分析を用いて、各尺度の因子構造の確認を行った。その結果、社会的スキル尺度は、原尺度と同様に3因子構造を仮定し分析を行ったところ、CFI=.90, RMSEA=.07であった。心理的ストレス反応尺度は、原尺度と同様に4因子構造を仮定し分析を行ったところ、CFI=.98, RMSEA=.05であった。さらに、各尺度の内的整合性を確認するために、 α 係数および ω 係数を算出した。その結果、社会的スキル尺度については、各下位因子において $\alpha=.57-.78/\omega=.60-.78$ 、心理ストレス反応尺度については、各下位因子において $\alpha=.82-.94/\omega=.82-.94$ であった。これらの結果から、両尺度ともに、想定した因子構造モデルのデータへの適合は良好であり、一定の内的整合性を有することが確認されたと判断し、その後の分析に使用することとした。

群分けおよび記述統計量

BISの平均値と標準偏差(SD)をもとに、平均値から+0.5SD以上に該当した生徒をBIS高群($n=20$)、-0.5SD以下に該当した生徒をBIS低群($n=24$)、それ以外の生徒をBIS平均群($n=15$)とした。各群における各尺度の記述統計量をTable 1に示す。

各群におけるSSTの効果

BIS高群、BIS平均群、BIS低群におけるSSTの効果を検討するために、社会的スキル尺度、心理的ストレス反応尺度、BIS/BAS尺度の得点をそれぞれ従属変数として、群3(BIS高群、BIS平均群、BIS低群: between) × 時期2(pre, post: within)の2要因分散分析を行った。また、各群における従属変数の変化について、効果量としてCohen's d を算出し、効果の大きさの検討を行った。効果の大きさの基準については、Cohen(1988)に基づき、0.2未満を効果なし、0.2-0.5を小さい効果、0.5-0.8を中程度の効果、0.8以上を大きい効果と判断した。

社会的スキルの変化「向社会的スキル得点」において、有意な時期の主効果が認められ($F(1, 56)=5.39, p=.02, \eta^2=.09$)、集団SST実施前から実施後において、向社会的スキルが上昇したことが示された(Figure 1)。各群における集団SST実施前後の効果量は、BIS高群 $d=-.34$ 、BIS平均群 $d=-.48$ 、BIS低群 $d=-.13$ であり、BIS低群と比べると、BIS高群とBIS平均群において、効果量が大きい傾向にあることが示唆された。

また、「社会的スキル総得点」においても、有意な時期の主効果が認められ($F(1, 56)=7.66, p=.01, \eta^2=.12$)、集団SST実施前から実施後において、社会的スキルが上昇したことが示された(Figure 2)。各群における集団SST実施前後の効果量は、BIS高群 $d=-.20$ 、BIS平均群 $d=-.38$ 、BIS低群 $d=-.29$ であり、BIS高群とBIS低群と比べると、BIS平均群において、効果量が大きい傾向にあることが示唆された。

Table 1 Descriptive statistics in each groups

	High level		Middle level		Low level	
	pre	post	pre	post	pre	post
BIS/BAS						
Behavioral Inhibition System (BIS)	22.90	20.80	18.80	16.93	14.83	13.79
	<i>2.63</i>	<i>2.42</i>	<i>3.10</i>	<i>3.94</i>	<i>3.50</i>	<i>3.60</i>
Behavioral Activation System (BAS)	33.90	35.40	32.93	35.73	33.63	34.17
	<i>6.86</i>	<i>6.25</i>	<i>8.87</i>	<i>10.46</i>	<i>7.94</i>	<i>9.16</i>
Social Skills						
Pro-social skills	11.65	12.20	11.67	12.73	12.21	12.50
	<i>2.25</i>	<i>2.09</i>	<i>1.91</i>	<i>1.91</i>	<i>2.40</i>	<i>2.32</i>
Withdrawn Behaviors	7.35	7.00	7.20	7.20	6.38	6.00
	<i>2.16</i>	<i>2.34</i>	<i>2.43</i>	<i>2.88</i>	<i>2.78</i>	<i>2.64</i>
Aggressive Behaviors	6.70	6.95	6.33	5.73	7.17	6.54
	<i>2.39</i>	<i>2.56</i>	<i>1.72</i>	<i>1.49</i>	<i>1.69</i>	<i>1.98</i>
Total score	37.60	38.25	38.13	39.80	38.67	39.96
	<i>4.56</i>	<i>5.25</i>	<i>3.60</i>	<i>2.70</i>	<i>4.30</i>	<i>4.34</i>
Psychological Stress Responses						
Physical Response	5.55	5.30	5.27	5.07	6.29	5.71
	<i>1.82</i>	<i>2.23</i>	<i>3.01</i>	<i>2.58</i>	<i>3.21</i>	<i>2.97</i>
Helplessness	7.30	6.75	6.13	5.60	6.13	6.13
	<i>2.90</i>	<i>2.97</i>	<i>3.02</i>	<i>3.07</i>	<i>3.22</i>	<i>3.81</i>
Depressive-Anxious Feeling	6.75	6.90	5.80	4.73	5.42	5.54
	<i>2.53</i>	<i>2.92</i>	<i>2.27</i>	<i>0.96</i>	<i>2.78</i>	<i>2.73</i>
Irritated-Angry Feeling	9.90	8.40	7.27	6.80	8.13	7.63
	<i>3.57</i>	<i>2.93</i>	<i>2.79</i>	<i>2.81</i>	<i>3.81</i>	<i>3.44</i>
Total score	37.10	34.40	31.27	28.13	32.38	31.17
	<i>7.27</i>	<i>9.56</i>	<i>12.34</i>	<i>9.74</i>	<i>14.23</i>	<i>14.42</i>

Note. SDs are in italic type

心理的ストレス反応の変化 「心理的ストレス反応総得点」において、有意な時期の主効果が認められ ($F(1, 56) = 5.26, p = .03, \eta^2 = .09$)、集団 SST 実施前から実施後において、心理的ストレス反応が低下したことが示された (Figure 3)。各群における集団 SST 実施前後の効果量は、BIS 高群 $d = .31$ 、BIS 平均群 $d = .26$ 、BIS 低群 $d = .10$ であり、BIS 低群と比べると、BIS 高群と BIS 平均群において、効果量が大きい傾向にあることが示唆された。

また、「不機嫌・怒り感情」においては、時期の主効果に有意傾向が認められ ($F(1, 56) = 3.91, p = .05, \eta^2 = .07$)、集団 SST 実施前から実施後において、不機嫌・怒り感情が低下する傾向があることが示された (Figure 4)。各群における集団 SST 実施前後の効果量は、BIS 高群 $d = .60$ 、BIS 平均群 $d = .14$ 、BIS 低群 $d = .15$ であり、BIS 平均群と BIS 低群と比べると、BIS 高群において、効果量が大きい傾向にあることが示唆された。

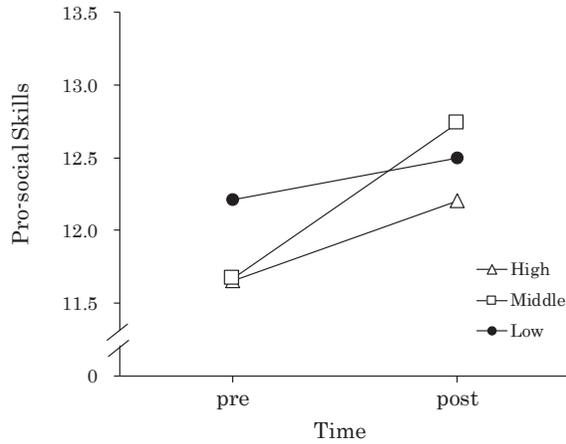


Figure 1. Changes of the pro-social skills score between pre SST and post SST

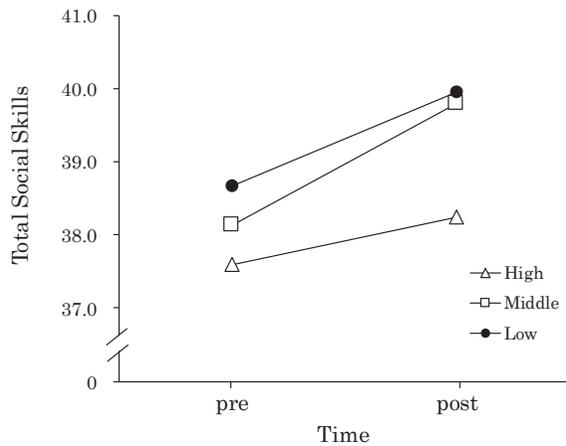


Figure 2. Changes of the total social skills score between pre SST and post SST

罰への感受性および報酬への感受性の変化「BIS得点」において、有意な主効果が群および時期に認められた（群： $F(2, 56) = 37.12, p < .01, \eta^2 = .57$ ；時期： $F(1, 56) = 18.62, p < .01, \eta^2 = .25$ ）。群の主効果について多重比較を行った結果、BIS高群が他の2群と比べて得点が高いこと、BIS平均群がBIS低群と比べて得点が高いことが示された。また、集団SST実施前から実施後において、罰への感受性が低下したことが示された（Figure 5）。各群における集団SST実施前後の効果量は、BIS高群 $d = .87$ 、BIS平均群 $d = .57$ 、BIS低群 $d = .31$ であり、BIS低群と比べると、BIS高群とBIS平均群において、効果量が大きい傾向にあることが示唆された。

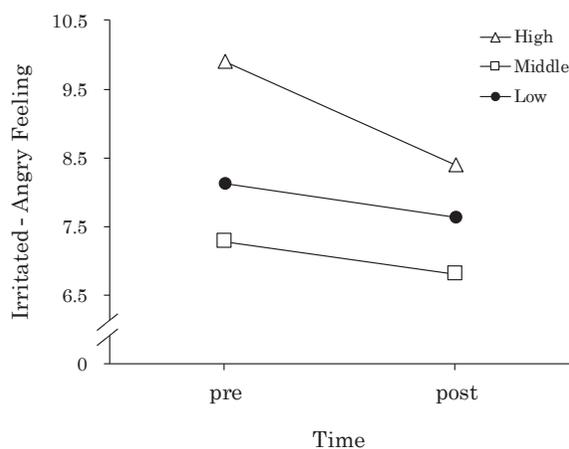


Figure 3. Changes of the irritated-angry feeling score between pre SST and post SST

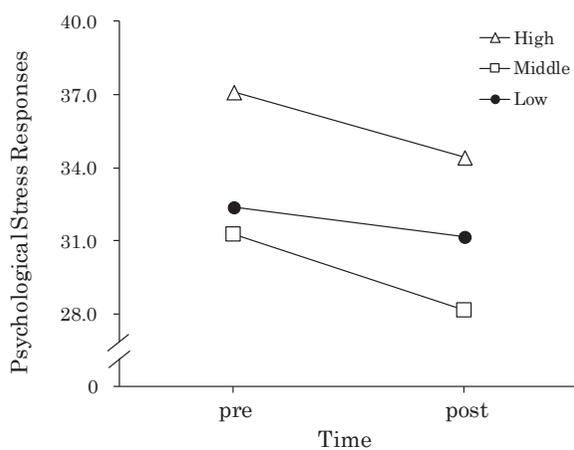


Figure 4. Changes of the psychological stress responses score between pre SST and post SST

また、「BAS得点」においては、有意な時期の主効果が認められ ($F(1, 56) = 4.21$, $p = .05$, $\eta^2 = .07$)、集団 SST 実施前から実施後において、報酬への感受性が上昇したことが示された (Figure 6)。また、各群における集団 SST 実施前後の効果量は、BIS 高群 $d = -.24$ 、BIS 平均群 $d = -.33$ 、BIS 低群 $d = -.06$ であり、BIS 低群と比べると、BIS 高群と BIS 平均群において、効果量が高い傾向にあることが示唆された。

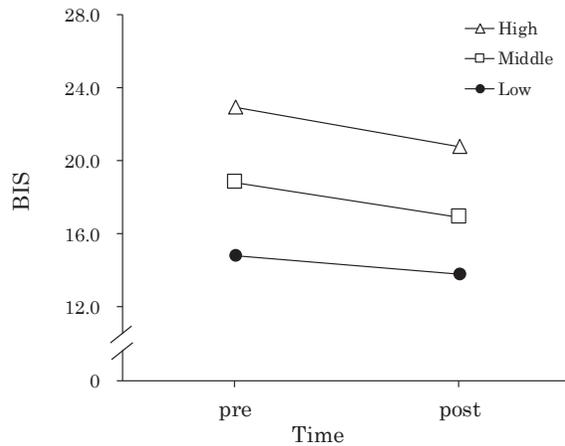


Figure 5. Changes of the BIS score between pre SST and post SST

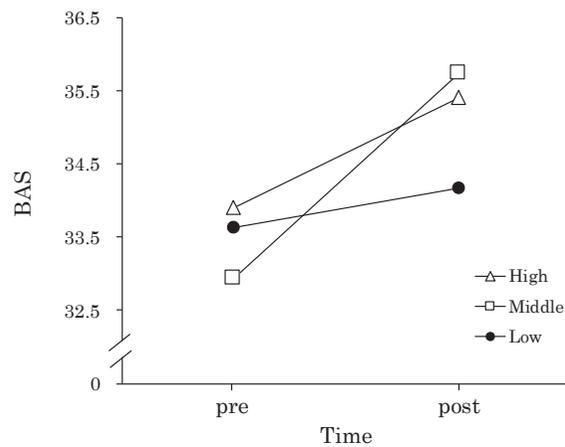


Figure 6. Changes of the BASs score between pre SST and post SST

考 察

本研究の目的は、罰への感受性を個人差変数として、社会的スキルおよび心理的ストレス反応に対する集団 SST の効果にどのような差異が生じるかを検討することであった。その結果、集団 SST の実施後に、向社会的スキルが増大することが明らかとなった。それ加えて、報酬への感受性を示す BAS も高まっていることを踏まえると、集団 SST で標的スキルとして取り上げた「あたたかい言葉かけ」が、生徒の他者への接近行動を高めた可能性がある

考えられる。さらに、向社会的スキルにおける各群での効果の差異については、効果量で見ると、罰への感受性が平均水準から高い水準を示す生徒において、小から中程度の効果を有することが示された。また、心理的ストレス反応については、集団 SST の実施後に全体的な心理的ストレス反応が低下することが明らかとなった。各群における効果の差異については、罰への感受性が平均水準から高い水準を示す生徒において、小から中程度の効果を有することが示された。これらの結果をまとめると、本研究で実施した集団 SST のセッションは、罰への感受性の水準が低い生徒には顕著な効果を示さないが、平均水準あるいは高い水準を示す生徒（今回の対象者の約60%）には、一定の効果が認められると考えられる。しかしながら、得られた効果量は必ずしも大きいものではなかったが、一次的援助サービスにおいては、得られた効果サイズが小さかったとしても、予防といった観点からは有意義な成果であるとの指摘（石川他, 2010）もあることから、1回の SST で得られた結果としては、ひとつの資料を提供するものと思われる。

また、本研究では社会的スキルおよび心理的ストレス反応といった主となる検討のほかに、罰への感受性である BIS および報酬への感受性である BAS の集団 SST 前後の変化についても分析を行った。その結果、BIS においては、罰への感受性が平均水準あるいは高い水準を示す生徒において、中程度を超える効果量が得られた。罰への感受性の水準で群分けを行っているため、平均への回帰が生じている可能性もあるが、低い水準の生徒においても低下が認められている。また、BAS においても、罰への感受性が平均水準あるいは高い水準を示す生徒において、小から中程度の効果量が得られている。本来、罰への感受性や報酬への感受性は気質としてとらえられるものであり、短期間に変化するものではないと考えられる。小関他（2018）においても、高い再検査信頼性の検討においても一定程度の安定性を有することが確かめられている。そのため、集団 SST が罰への感受性の改善に寄与する潜在的な可能性を有しているのかどうかについては、さらなる検討が必要である。

最後に、本研究の課題として、統制群が設定されていないことがあげられる。したがって、本研究で得られた変化が、すなわち集団 SST の効果であるとは厳密には断定できないことには留意する必要がある。実践研究の場合、統制群を設定することが困難な場合もあるため、実施時期をずらし、測定を工夫するなど、集団 SST の前後で生じた変化を効果と判断できるための工夫も必要となる。つぎに、本研究で使用した測度は、すべて生徒本人が回答する自己評定尺度であった。これらの自己評定尺度は、集団 SST の先行研究において行動指標や他者評定などの外的指標とともに用いられているものではあるが、本研究で得られた結果の妥当性を主張するためには、他の指標とのバッテリーを検討することも必要である。

引用文献

- 相川 充 (1998). 孤独感を低減させる社会的スキル訓練の効果に関する実験社会心理学的研究 平成8年度～平成9年度科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書
- 荒木 秀一・石川 信一・佐藤 正二 (2007). 維持促進を目指した児童に対する集団社会的スキル訓練 行動療法研究, 33, 133-144.
- 江村 理奈・岡安 孝弘 (2003). 中学校における集団社会的スキル教育の実践的研究 教育心理学研究, 51, 339-350.
- 後藤 吉道・佐藤 正二・佐藤 容子 (2000). 児童に対する集団社会的スキル訓練 行動療法研究, 26, 15-24.
- 今津 芳恵 (2005). 社会的スキルの欠如が抑うつに及ぼす影響——女子中学生を対象とした場合—— 心理学研究, 76, 474-479.
- 石川 信一・岩永 美智子・山下 文大・佐藤 寛・佐藤 正二 (2010). 社会的スキル訓練による児童の抑うつ症状への長期的効果 教育心理学研究, 58, 372-384.
- 石隈 利紀・水野 治久 (2009). 学校での効果的な援助をめざして——学校心理学の最前線 ナカニシヤ出版
- 金山 元春 (2006). 心があたたかくなる言葉 相川 充・佐藤 正二 (編) 実践! ソーシャルスキル教育中学校——対人関係能力を育てる授業の最前線—— (pp. 66-67) 図書文化
- Cohen, J. (1988). *Statistical power analysis for the behavioral sciences*, 2nd ed. New Jersey: Lawrence Erlbaum.
- 小関 俊祐 (2012). 児童用 BIS/BAS 尺度日本語版作成の試み 日本ストレスマネジメント学会 第11回発表論文集, 19.
- 小関 俊祐・小関 真美・中村 元美・大谷 哲弘・国里 愛彦 (2018). 日本語版児童用 Behavioral Inhibition System and Behavioral Activation System Scale (児童用 BIS/BAS 尺度) の作成と信頼性・妥当性の検討 認知行動療法研究, 44, 29-39.
- Gray, J. A. (1982). *The neuropsychology of anxiety: An enquiry into the functions of the septo-hippocampal systems*. Oxford, UK: Oxford University Press.
- Ladd, G. W. (1985). Documenting the effects of social skill training with children: Process and outcome assessment. In Schneider, B. H., Ribin, K. H., & Ledingham, J. E. (Eds), *Children's peer relationships: Issues in assessment and intervention*. New York, Springer-Verlag.
- 森 優貴・袁崎 浩史・森本 克明・長瀬 裕子・嶋田 洋徳 (2012). 不登校経験のある高校生の主観的学校適応感に対する学級集団を対象とした認知的再体制化および社会的スキル訓練の効果 ストレスマネジメント研究, 9, 41-48.
- Muris, P., Meesters, C., Kanter, E., & Timmerman, E. P. (2005). Behavioural inhibition and behavioural activation system scales for children: Relationships with Eysenck's personality traits and psychological symptoms. *Personality and Individual Differences*, 38, 831-841.
- 中西 陽・石川 信一・神尾 陽子 (2016). 自閉症スペクトラム症的特性の高い中学生に対する通常学級での社会適スキル訓練 教育心理学研究, 64, 544-554.
- 佐藤 正二 (1999). 社会的スキル訓練 中島 義明・安藤 清志・子安 増生・坂野 雄二・繁樹 算男・立花 政夫・箱田 裕司 (編) 心理学辞典 (p. 371) 有斐閣
- 嶋田 洋徳 (1998). 小中学生の心理的ストレスと学校不適応に関する研究 風間書房
- 高橋 史・小関 俊祐 (2011). 日本の子どもを対象とした学級単位の社会的スキル訓練の効果——メタ分析による展望—— 行動療法研究, 37, 183-194.
- 高橋 雄介・山形 伸二・木島 伸彦・繁樹 算男・大野 裕・安藤 寿康 (2007). Gray の気質モデル——BIS/BAS 尺度日本語版の作成と双生児による行動遺伝学的検討——パーソナリティ研究, 15, 276-289.
- 戸ヶ崎 泰子・岡安 孝弘・坂野 雄二 (1997). 中学生の社会的スキルと学校ストレスとの関係 健康心理学研究, 10, 23-32.

Summary

Effects of class-based social skills training on junior high school students: Examination of difference of effects depending on sensitivity to punishment

Koji Minosaki

This study investigated the effects of a class-based social skills training (SST) for junior high school students on their social skills and psychological stress responses to determine variance depending on the degree of the student's sensitivity to punishment. Overall, 59 7th-grade students (30 boys and 29 girls) participated in a 50-minute SST session targeting the skill of using warm words in relationships with others. Before and after the SST, the participants answered a worksheet with items taken from the Behavioral Inhibition System (BIS)/Behavioral Activation System (BAS) Scale, the Social Skills Scale, and the Psychological Stress Responses Scale. The BIS/BAS Scale was used to assign students to one of three groups (high level, middle level, and low level). The results of ANOVA (group \times time) indicated significant improvements for all groups. (a) For pro-social skills, small to medium effect sizes were shown (high level: $d = -.36$, middle level: $d = -.48$, and low level: $d = -.13$). (b) For overall social skills, small to medium effect sizes were shown (high level: $d = -.20$, middle level: $d = -.38$, and low level: $d = -.29$). (c) For psychological stress responses, small to medium effect sizes were shown (high level: $d = .31$, middle level: $d = -.28$, and low level: $d = -.10$). These results suggest that it may be possible to enhance the efficacy of SST by conducting such a training after group characteristics, such as sensitivity to punishment, are assessed.

Keywords: behavioral inhibition system, class-based social skills training, psychological stress response, junior high school students